





File 11

ぽんめのこ “手づくりの温もりを生かした仕事づくりの仕組み”

フェルト作家

ぽんめのこ／秋田順子

<http://ponmenoko.com/>

障害者就労継続支援 B型事業所

chord

<http://ifme-chord.com/>

ハンドメイド作品を通した豊かなつながりのあるコミュニティをめざすブランド。chord利用者がつくる刺繍モチーフを、フェルト作家がブローチや指輪に加工することで作品が完成。鮮やかな色彩と繊細な手しごとに各々の個性が光ります。



▲ リングやブローチなどのアクセサリーをはじめ、ポーチやTシャツなど多様なプロダクトをウェブ上でも販売。一点一点の色やかたち、刺繍の位置が異なるのも魅力です。

フェルト作家と福祉事業所のコラボレーション！

秋田さん、井藤さん、 どうやって実現したんですか？

Q1

本プロジェクトをはじめたきっかけについて聞かせてください。

秋田：雑貨ブランド「ぽんめのこ」は、“みんなが笑顔になるように”という願いを込めた、人とのつながりをコンセプトにした雑貨ブランドです。2012年、仕事に行けない子育て中の方たちを対象に、雑貨づくりを通した新たな雇用創出としてスタートしました。chordとの出会いは、私たちの作品を委託販売している雑貨店で見つけたカラフルな刺繍のついたヘアゴム。引き寄せられるように手に取ったところ、障害のある人がつくった作品だと知って、そのクオリティに驚くと同時に興味をもちました。子育て中のおかあさんと同じように、障害のある人もまた働く場所や社会との接点が限られています。この素敵な刺繍を生かして、新たな仕事も創出できたらと考え、chordを運営するifmeの井藤さんに相談し、今回のコラボレーションがはじまりました。

Q2

プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

井藤：商品の特徴である「色」にはこだわっています。その「色」の出し方は、づくり手一人ひとり異なり、自己表現の一部でもあると考えています。なので、



ぽんめのこ

秋田順子さん／デザイナー



株式会社 ifme

井藤瑞栄さん／代表取締役

私たちが色の指定を行うことはなく、一人ひとりが生み出す「色(＝個性)」を大切にしています。技術向上はもちろんですが、なにより大切にしているのは、づくり手が楽しんでつくれる環境づくり。楽しくつくるからこそ、ポップでカラフル、エネルギッシュな作品が生まれ、それがお客さまにも伝わっているんじゃないかなと思っています。

Q3

今後の展開や期待していることについて、お聞かせください。

秋田：今後はさまざまなメディアの力をお借りして、「みんなで作くり上げていくブランド」として広く伝えていくことを通して、全国の福祉事業所とつながりをもち、共生していくことをめざしています。また、デザイナーや障害のある人、福祉と現場の人たちとの協働のあり方について、より多くの人と共有し、模索していきたいと考えています。そうしてはたらきやすい環境づくりの場を広げることが、豊かな社会づくりへとつながっていくのではないのでしょうか。つくる喜び、生きる喜び、商品となって売れる喜び、誰もが「笑顔」になれるような、そんな温もりのある、「愛」ある制作活動をめざし、現代社会における豊かな人と人とのつながりのモデルコミュニティであり続けたいと思います。

3 TOPICS

量産可能な手づくり雑貨の仕組み！



デザイナー、仕事に行けない育児中のおかあさん、障害のある人たちが働く施設がつながることで、それぞれの得意を引き出す仕事づくりを実現。手づくり雑貨でありながら量産可能で、みんなで作くりあげるブランドとして、ネットワークを構築しています。

それぞれの能力を「素材」ととらえる！



特別な才能(刺繍)をもった人のつくりあげた素材とのコラボレーションで作品を制作。それぞれの個性が表れる色彩豊かな刺繍、またそれを生かしたデザイン、また裁断、制作、梱包など小さな能力の集合体により、「ぽんめのこ」ブランドをつくりあげています。

小さな「できる!」を重ねて、つくる。



「ぽんめのこ」では、NPO法人夢工房との協働で木工商品も展開中。かたちを切り出す、紐を切る、焼きごてで絵を描く、焼印、接着、ヤスリをかけるなど、完成までの工程を細かく分解することで、少しずつ「できる!」が増えることに楽しみを感じられる仕組みづくりを構築。

ぽんめのこ【創立：2012年 拠点：愛知県中村区】

おかあさんや障害のある人とともにつくるフェルト雑貨のブランド。手づくりの製品にこだわり、豊かなつながりをテーマに活動しています。

障害者就労継続支援B型事業所 chord【創立：2015年 拠点：愛知県海部郡】
協調、共聴、共存し共鳴できる環境づくりをコンセプトに、障害のある人が作家として活躍できる場をめざしています。



File 12

よしすけツールキット “デジタル工作機器でつくる新しいしごとの仕組み”

社会福祉法人藤沢育成会

よし介工芸館

<http://www.f-ikusei.or.jp/>

慶應義塾大学

水野大二郎研究室

<http://xd.sfc.keio.ac.jp/people/laboratory/mizuno-lab/>

福祉施設にカッティングができるデジタル機材を導入し、よし介工芸館で活動する人たちの絵をもとに、オリジナルのアイテムが作れるアイロンピースを作成。障害のある人の作品を社会とつなげるための、新しい活用モデルが生まれています。



▲ よしすけツールキットを使ってつくったオリジナルグッズ。顔のパーツが入ったセット、虫のようなモチーフのセットなど、現在4種類が販売されています。

福祉施設と大学のコラボレーション！

大森さん、水野研のみなさん、 どうやって実現したんですか？

Q1

本プロジェクトをはじめたきっかけについて聞かせてください。

水野：文部科学省COI STREAMによる「感性とデジタル製造を直結し、生活者の創造性を拡張するファブ地球社会創造拠点」の活動のひとつとして、ファブ（＝ものづくり）を通して障害者支援施設に新たな仕事をつくり出すことを目的に、2013年から研究室での企画を立ち上げました。Able Art Companyの柴崎さんから共同研究先として、よし介工芸館をご紹介いただき、協働プロジェクトが生まれました。

Q2

プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

木許：デジタル工作機材を用いることで、原画をデータの世界に持ち込み、より多くの商品展開を可能にしました。また、ツールキット形式を採用したのは、購入者による二次創作を通して、障害のある人が描いた絵画をもっと身近に感じてもらうためです。開発にあたっては、弁護士らと連携し、作家の権利を適切に守りつつ、二次創作や作品の公開を促すことを可能にする制度設計を構築しました。

須佐：施設と学生間の協働では、単にプロダクトのデザインをするのではなく、障害があっても積極的



社会福祉法人藤沢育成会 よし介工芸館
大森正人さん / 職員



慶應義塾大学水野大二郎研究室
水野大二郎さん / 准教授
木許宏美さん・須佐和希さん / 学生

に関われる「生産方法」とともに設計することで、ファブを活用した新しい福祉の仕事のかたちを明らかにすることを重視し、プロジェクトを進めました。

Q3

今後の展開や期待していることについて、お聞かせください。

大森：障害のある人の作品の特徴を生かした商品に仕上がっていると感じています。みなさんからのご提案は、いつも作品を新しい視点からとらえていて、私自身も学びが多いです。今後も、それぞれの専門分野・持ち味を生かし、さらに新しく、みんながワクワクするようなものづくりを展開できたらと思っています。また、この活動を通して、作者・利用者の方々が社会とつながるきっかけになればと考えています。

水野：これからの新しい仕事については、短期的なものから長期的なものまで、いろいろと検討中です。例えば、「オープン＆クローズ戦略」をどう取り扱うか。原作者の権利を守りつつも、より多くの人に周知するための方法のひとつとして制作されたデータをどう公開するか、といった話です。仕事づくりは、仕組みとモノ双方から成り立ちますが、インターネットやITを追加すると、さらに複雑さが増します。短期・長期的にも、紐解いていければと思っています。

3 TOPICS

ファブ×福祉の可能性を探る試み！



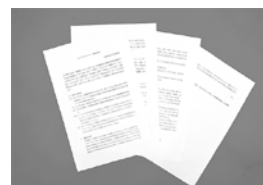
3Dプリンタなどのインターネットとつながるファブ機材の普及により、誰もが自由にものづくりに参加できる状況が生まれています。その状況に着目し、大学の研究室という立場から、ファブ×福祉を組み合わせることで、どんな未来が実現できるか模索しています。

二次創作によって、完成する商品。



よし介工芸館に所属する作家の原画をファブ機材でパーツ化し、色とりどりのアイロンピースを開発。アイロンピースでの創作を通して「原画やアーティストのものづくりのものがたりが生まれることを期待」し、「使える」ツールキット形式を採用しています。

法のデザインで、著作権を適切に守る。



購入者による二次創作や公開を促進しつつ、作家の著作権を守るためにCCライセンスを採用。弁護士・水野祐氏との協働で、利用規約やQ&Aの作成、著作権ガイドラインの修正を行い、ツールキットから生まれる今後の展開も視野に入れたデザインが行われています。

社会福祉法人藤沢育成会 よし介工芸館【創立：1994年 拠点：神奈川県藤沢市】
創る、働く、話し合うを重視した日中活動や、自主制作、作品展を通して、障害のある人の社会参加を助ける活動を行っています。

慶應義塾大学水野大二郎研究室【創立：2012年 拠点：神奈川県藤沢市】
実践的なデザインリサーチやインクルーシブデザインの研究を通じた、柔軟な発想ができる「新しいデザイナー」の育成を目的としています。

The Modernology of Good Job!

リサーチ・文：津田和俊 [研究者] 絵：望月梨絵 [イラストレーター]

岡山市と倉敷市のあいだに、かつてイグサの産地、またそのかつては島だったことに由来する早島町がある。その早島駅から西の方角に少し歩くと、蔵や町家などの古い軒並みの1軒に「ぬか」という看板が掛かっている。この築100年以上の蔵の中にあるのが、生活介護事業所「ぬかつくるところ」である。

もともと人が集まる場所だったというこの場所は、かつて母屋を開放してソロバン塾、また、法律がない時代の先進的な福祉事業として、刑務所上がりの方を受け入れる更生保護施設が営まれていたとのこと。そのような歴史をもつここは、今なお、さまざまな人が行き交い、それぞれの暮らしを営む拠点となっている。

「ぬかつくるところ」では、ここを利用する多彩な人たちやスタッフのことを総称して、「ぬかびと」と呼んでいる。日々ふつふつと発酵するように、自分の関心のあることを見つめ、得意なことを突きつめ、じっと爆発させている人たち。そして、楽しむことが好きな人たち。今回の取材中も、突然ある部屋で演奏がはじまった。落ち着いたかと思ったら、また別の部屋で突如パフォーマンスがはじまる。しかし、そんなことにも動じず、ちくちくと刺繍づくりや風刺、プラ板アクセサリづくり、“変身”を楽しむ人たちの姿もある。

一方、この場所に遊びにやってくる人たちのことは「まぜびと」と呼ばれている。ぬかどこを混ぜるように、新鮮な空気を運んでくる役割だ。また、楽しすぎてなかなか帰れなくなると、「ぬかるみにはまる」と言う。ほかにも、トークや演奏などのお祭りを「ぬかよろこび」、ほかの団体企画との連携の催しは「ぬかばこ」、会議は「ぬかばなし」、恋話をすることもある討論会は(も)「ぬかるみ討論会」、研修は「ぬカレッジ」……、とだんだん厳しくなってくるが、とにかく楽しむことにぬかりがない。

半日も漬かると、あることに気づく。あたたかい。蔵の中だから、格子戸から日差しが差し込むから、冬で暖房が入っているから、シェフのつくる美味しいランチを食べたから、「ぬかびと」のあたたかさから、か。ともかく、ぬか漬けになった気になって、蔵を後にした。(文：津田和俊)

Good Job!な活動を展開する、岡山の生活介護事業所「ぬかつくるところ」。
「The Modernology of Good Job! - Good Job! 考現学 - 」と題し、
＜若手研究者の視点×考現学の方法論＞で観察し、ひも解きました。



とださんのコミュニケーションは
ポスターで勉強中。

とださんの日課は
その日の新聞や日記に
風来りを書き込むことだ

とだみくじ

とだのま出張
おみくじ。
とださんの一言
「とだみくじ」
ひけます。

寝るのも大切な
仕事。

寸席も
即興で
行われて
いました。
この日は
ゴジラ。

ちかさんの出張
5く5くワークショップ
も国展も開催される

変身ベルト
キットも有。
出張ワー
ショップも
します。

この日は
「日替わりニュー・
ジビエ」カレー（イノシシの肉）

上木戸工作室

株式会社ぬか
生活介護事業所 ぬか つくるところ

2013年(平成25年)
住所: 岡山県都窪郡早島町早島1465-1
代表者: 中野厚志 活動会員(利用定員): 20名

keep trying...

アートが盛んではない現場での、福祉とデザインを考える



の場合

はじまり



ライラ・カセムさんが感じていた問題意識は……

アート活動がさかんでない施設、スターでない人はどうするのか？



Entente (アンタント) とは……

フランス語で「一定の信頼関係からなる了解・妥結」という意味。デザイナーと社会福祉の専門性をもつスタッフが協働し、信頼関係をもった上で利用者一人ひとりの秘めているアートの個性を引き出し、デザインや商品につなげるプロジェクト。

綾瀬ひまわり園とは……

東京都足立区にある「社会福祉法人あだちの里」が経営する通所型の社会福祉施設。利用者は90名ほどで軽度から重度の知的障害とさまざまな。就労A型、B型、生活介護の福祉事業を運営している。生活介護の賃金は月3,000～5,000円程度。アート活動は週1回2時間支援スタッフ2名が担当し、15名の利用者が参加している。

ひまわり園スタッフ・菊地さんが考える

障害のある人とデザイナーの可能性

「あーとわーく活動」を通して、ライラさんは3年のお付き合いになります。活動の中で彼女がおもしろい画材をもって来ることや、一人ひとりに寄り添い興味あるものを理解して利用者さんにさまざまな活動を提供しお手伝いをしてくださることにより、彼らのアートに対しての可能性の幅が広がった多くの瞬間を見てきました。また、私自身がそのような場面に立ち会えたことにより、この利用者さんの絵の具の量や薄さはこのぐらいが好みで適している、実はこのような取り組みもできるのではないかなど、調整と新しいことへの挑戦を考えてサポートできる力がつきました。

佐藤千枝さん(ひまわり園施設長)

これまで何気なく描いては倉庫に埋もれてしまっていた絵が、藝大の学生さんのアイデアとデザインがプラスされることで、さまざまな要素が加わり作品へと変化していく様は、とても刺激的で可能性の広がりや大いに実感したプロジェクトでした。

2014

STEP 02

綾瀬ひまわり園の状況を変える取り組み



伝統行事の再解釈

Hinamatsuri Project

ボスニア、ポルトガル、日本の3チームが、それぞれ独自の社会的、文化的背景と視点からデザイングッズや作品に落とし込み制作。ワークショップを実施し、生まれたプロトタイプから、展覧会を企画。



プロジェクトの成果を発表

「我が家のひなまつりへようこそ」展

2月14日～16日、京都市のしまだいギャラリーにて開催された展覧会内で「Hinamatsuri Project」の成果物を発表。プロトタイプをつくるだけでは継続した仕事につながらず、持続性をどう考えるか課題が生まれました。

STEP 01

東京を拠点に活動するデザイナーが福祉事業所へと投げかけた問題提議

綾瀬ひまわり園
社会福祉法人あだちの里

グラフィックデザイナー
ライラ・カセム

福祉施設において、商品となる絵のほとんどが、もともとアートのセンスが高い「スター」によるもの。しかし全国の施設のほとんどは頻繁にアート活動をやっていない。素質があるのに見過ごされている人、まだスターでない人はどうするのか？ 支援スタッフと一緒に仕組みを考えたい。

コスモリカバリーセンター・水野さんが考える
日々の表現とデザインの可能性

本センターは、精神障害や発達障害をもった利用者のみなさんが集まり、さまざまな活動や体験を重ねる場所です。日々の活動のなかで、絵画や簡単な手芸品などをつくる機会はありませんでしたが、安積歴史博物館でライラさんと過ごした時間は、まったく異質な時間でした。博物館の独特な雰囲気のおかげで、さりげないものや風景からつくり出される作業を繰り返すことが、はじめて感じる表現する喜びや、日常の一瞬、1コマにフォーカスすることのおもしろさを感じさせてくれました。今回の活動を通して、「デザインすること」が表現・制作・展示などの工程や作業の連続性と、イメージネーションの結晶であることを、身をもって体験したように思います。そして、どうすれば自分たちの普段の活動でも続けていくことができるのだろうか、とみんな考えています。利用者さんのなかには、自分の制作することへの情熱や可能性を再確認し、作業や活動ができる場や時間を確保して、興味のある仲間を募っていこうと話している方もおり、今後の可能性を感じています。

2014

2015

STEP 03

週に1度のアートクラスを担当し、想像力を引き出すための方法論を見出す



1年間、アート講師として毎週ひまわり園に通い、一人ひとりに寄り添いながら、それぞれの才能を開花させる方法をスタッフと開発。制作の質を上げ、最小限の手助けをすることで実現する作品をめざした。ポイントは、利用者が描くことに喜びを感じるのか、作品として完成することに達成感を得るのか見分け、時間をかけてデザインの「素材」となるアートを吟味し、スタッフの意識を醸成すること。

障害問わず、想像能力を開発する8つの方法

1 画材とサイズを変える

画材ひとつで絵の印象は大きく変わる。また、題材写真と同じ大きさで描くことを促すだけで作品がより明確かつ生き生きとする場合もある。

2 動き・行動をアートに転換する

利用者が好むちょっとした動きや行動、本人は気づいていない癖などの感覚が造形能力を高めるための良いヒントとなる。

3 テンプレートをつくる

円や四角などシンプルなかたちに色塗りのモチーフを設定することで、利用者一人ひとりの特徴的な色使いと線のタッチが出てくる。

4 新しい表現道具をつくる

描く感覚に達成感を感じる人には、新しい刺激も大事。利用者が日頃使い慣れている材料で道具をつくり、表現の可能性を開いていく。

5 言葉でサポートし、自立した決断力を

描いたものが正しいかどうか聞かれた時に、「いいですね」「素敵です」などの言葉をかけるだけで利用者を勇気づける。決して指示はしない。

6 創造能力の開花・発展のための題材選び

同じ造形行動を繰り返すだけでなく、ちょっとした興味や出会いから関心を広げて、新しい題材へと広がっていくことも大事。

7 作品の真の意味を読み取る

利用者の制作に対する動作やスタイル、想いを徹底的に観察し、作品の裏にある意味となぜ描いているのかを読み取ること。

8 自発的なドローイングの後押し

グリッドの升目を使い多様な平面や立体を描くことで、かたちと空間の認識能力を高める。利用者が自立して描いていくための手段となる。

STEP 04

2015

施設の職員とともに施設内外で活用できるデザインの開発を進める



- ① ミュージシャン・福原美穂のCDジャケットに利用者の作品を採用
- ② テキスタイル開発とパターンのライセンス化
- ③ 利用者の作品スタンプを押すだけのシンプルなパッケージ

STEP 05

2016

施設で培ったデザインメソッドを用い、博物館×リカバリーセンターと協働する



福島県の安積歴史博物館内で3週間にわたり「Anreki Drawing Studio」を設立し、地元の福祉施設・コスモリカバリーセンターとともにアートワークショップを開催。作品からグッズ開発、印刷物のデザインなどを行う。

デザイナー・ライラさんが考える

デザインと福祉の現場の可能性

社会で孤立しがちな人々のユニークな個性や観点が人々の日常の風景に取り入れられることです。施設で眠っているアートに文化価値があり、新鮮な視点を世の中に提供できます。福祉の枠を超えてスマートに受け入れることが多様性を受け入れる社会を構築するんだと思います。また、作者自身が社会参加できる機会とある程度の経済自立は必然です。それができるのがデザインだと信じています。デザインには1を100のかっこいいものにできる技術があります。絵を1としてそれを100に変えてお金をすれば少しでも作者に還元できる。また、デザイナー自身も今後このような現場で取り組めるように、作者との間でのフェアかつ経済的な仕組みづくりを計画中です。



グラフィックデザイナー
ライラ・カセムさん
社会福祉施設と協働し利用者のアート活動を強化し、その作品をもとにデザイン商品の制作・開発を行っている。



綾瀬ひまわり園 社会福祉士
菊地 菜々美さん
「社会福祉法人あだちの里 綾瀬ひまわり園」生活介護事業支援員3年目。選択活動「あーとわーく」に3年携わっている。



コスモリカバリーセンター施設長
水野博文さん
1975年生まれ。福島県郡山市在住。精神保健福祉士として、主に精神障害者の地域生活支援を行っている。

8Exhibition
Information

GoodJob! 2016-2017
TOKYO 2.24 (fri) - 26 (sun) 渋谷ヒカリエ 8F 8 / COURT
アート・デザイン・ビジネス・福祉の分野をこえて、新たな出会いとしごとが生まれる場

SEMINAR 1

24金
セミナー「学生×デザイン×福祉の可能性」
18:30-20:30 渋谷ヒカリエ 11階 Hikarie カンファレンス Room D
基調講演:「なぜデザインが必要なのか」／藤崎圭一郎(東京藝術大学美術学部デザイン科教授) 事例報告①:「福祉と学生の関わり方」／ライラ・カセム(グラフィックデザイナー、東京大学先端科学技術研究センター特任助教) 事例報告②:「Fabと福祉の可能性を見いだす 〜よしすけツールキットの開発〜」／木許宏美(慶應義塾大学環境情報学部) フロア・ディスカッション: 藤崎圭一郎 + 水野大二郎(慶應義塾大学環境情報学部准教授) + 原田祐馬(UMA/design farm 代表、京都造形芸術大学空間演出デザイン学科客員教授)

SEMINAR 2

25土
フォーラム「これからののはたらき方を語り合う2時間」
18:30-20:30 渋谷ヒカリエ 11階 Hikarie カンファレンス Room D
基調講演:「未来をつくるイノベーターという人々」／田村大(株式会社リ・パブリック 共同代表、東京大学 i.school 共同創設者) セッション:「Good Job! NOW 〜障害のある人との協働実践者〜」／Good Job! Award 入選者

PRESENTATION

26日
最終プレゼンテーション、審査会、表彰式
13:30-16:30 渋谷ヒカリエ 8F 8/COURT
審査員長: 田村大(株式会社リ・パブリック 共同代表) 審査員: 塩瀬隆之(京都大学総合博物館准教授) ナガオカケンメイ(デザイン活動家) 前川亜希子(エイブルアート・カンパニー商品開発ディレクター) 柴崎由美子(NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事) 原田祐馬(アートディレクター / デザイナー)
大賞賞金:10万円

企画展 よくはたらき、よくいきる

障害のある人の存在や個性、表現を起点とし、地域にあるさまざまな団体、資源をつなぎ、地域にGood Job!を提案する4団体を紹介いたします。どの団体も障害のある人の仕事が「福祉」「障害」という枠をこえ、地域の人・文化・産業にとって、新しい価値観と仕事をつくりだしています。



NPO法人ボラリス

宮城



NPO法人リベルテ

長野



Po-zkk & 創-HAJIME-cafe
社会福祉法人一麦会

和歌山



株式会社ぬか

岡山

Good Job! Award 入選展

障害のある人との協働から生まれた魅力的なしごと・はたらき方を全国から募集。応募数55件のなかから選ばれた12件を紹介します。



「ICTと印刷の共同受注窓口」
一般社団法人えひめICTチャレンジ事業組合

愛媛



「ぼんめこのこ」
秋田順子

愛知



「チャリティスイーツボックス」
futacolab(フタコラボ)

東京



「Entente(アンタント)」
ライラ・カセム

東京



「OTON GLASS(オトングラス)」
株式会社 OTON GLASS

東京



「はじめは一本の糸から〜」
NPO法人ひょうたんカフェ

愛知



「土のうえ空のした」
NPO法人EPO

静岡



「すみのわ」
墨田区福祉作業所等ネットワーク<<KAI>>

東京



「藍染手ぬぐい・型染鯉のぼり」
NPO法人La Mano

東京



「森と住人の中で」
NPO法人ないなるサーカス団

奈良



「~Social Café- Sign with Me」
一般社団法人ありがとうの種

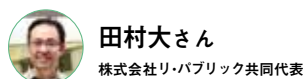
東京



「樹里文字プロジェクト」
たんぽぽの家アートセンターHANA

奈良

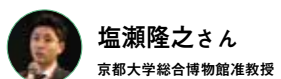
審査員コメント



田村大さん

株式会社リ・パブリック 共同代表

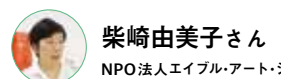
福祉事業所が抱えがちな問題に対して、解決の糸口となりうるモデル性の高い取り組みが多かったと思います。ハンドクラフトの適量生産、1点もので終わらない商品づくり、地元のリソースを組み合わせたブランド化、役割分担の環境づくりなど、さまざまな課題に対する仕組みは他の地域でも発展可能だと感じました。



塩瀬隆之さん

京都大学総合博物館准教授

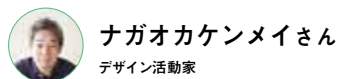
「はたらき方改革」の議論が進むなかで、アワード入選者の取り組みが先進事例として自治体や企業に伝わると良いですね。障害のある人を今あるものでフォローでき、プロデュースする手段があることを知ること、多様な人を多様なまま受け入れるのははたらき方のメニューを増やすことができるのだと思います。



柴崎由美子さん

NPO法人エイブル・アート・ジャパン 代表理事

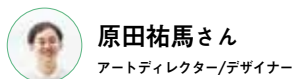
障害のある人が無理なくはたらくことを継続するためには、何が必要なのか、そのヒントを発見できました。当事者から「はたらきがい」を聞き出し、「はたらき方」の整理をすることが新たなしごとのアイデアにつながり、その丁寧な向き合い方から見える視点を日常の現場や生業に生かしたいですし、生かしてほしいと思います。



ナガオカケンメイさん

デザイン活動家

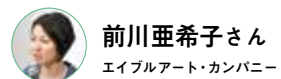
日本の伝統工芸や林業など、地域のなかで縮小傾向にある(でも地域にとって必要な)産業に、障害のある人が関わることの相性の良さを感じました。20、30年と森を育て、その木材を活用する作業、忍耐が求められる織りの作業など、職人不足に伴う衰退が課題となっている分野と福祉の関わりに興味があります。



原田祐馬さん

アートディレクター/デザイナー

今回の審査を通して、まだ僕たちも知らないプロジェクトと出会うことができ、それだけで新たなしごとの選択肢を伝えるアワードの意義があると感じました。可能性を感じさせるプロトタイプ、インスピレーションを与える活動を紹介するGJ!展を通して、訪れた人たちの“次の一歩”を後押しできたらと思います。



前川亜希子さん

エイブルアート・カンパニー 商品開発ディレクター

回を重ねるごとに「障害のある人がつくったものなら何でもいい」ではなく、障害のある人の個性を生かしつつも、まるで職人のような精度のあるプロダクト、また販売先を意識した商品開発、さらには市場を生み出しながら、障害のある人とともに温かい地域をつくる取り組みも育っているように感じます。



高橋孝治さん

インダストリアルデザイナー

提案や取り組みの「可能性」が大事だと思い、審査で議論を深めました。すぐに答えが見出せない課題に取り組む学生の意欲と、学生に寄り添う教育者の存在が見え、デザイン教育の未来を感じました。今回の応募や入選を機に、提案や取り組みの実現に向けてのさらなる進展を期待しています。



吉行良平さん

プロダクトデザイナー

今回の審査を通して、どの学生もそばにいる人を見つめることで、少しずつ自分自身の課題に気づき、何のためにデザインしているのかを把握しているのだと感じました。これは、デザインの根元だと思います。純粋に良くしたいという想いと福祉の現状がリアルに立ち上がっているアイデアが多く見られましたね。



原田祐馬さん

アートディレクター / デザイナー

今年から学生アワードはじめることができ、商品開発だけでなく、アイデアやリサーチなど多岐にわたる提案と出会えたことに意義を感じました。特にデザインを学ぶ学生たちが、福祉にまつわるアイデアについて考えはじめていることは大きな一歩だと思います。これらのアイデアが実装できる社会が目にあることにも未来を感じました。

FIELD NOTES

Good Job! な活動と出会い、感じ考えたことをつづる

from Korea

社会とつながる 可能性を追求する

執筆

コ・ジェフィル rawside共同代表 / 映像作家

学生時代より障害のある人とアート活動についての映像作品をつくり、福祉施設でボランティアやスタッフを経験。2012年よりNPO rawside共同代表。2015年からはit-jangのプロデューサーを務める。

2008年、韓国・ソウルを拠点に、障害のある人たちのアート活動を支援する「rawside」を立ち上げました。現在は、発達障害・精神障害のある人を中心に約10人が活動しています。アーティストの育成はもちろん、公共文化施設でのアートプロジェクトの運営やソウル市立北部病院でのプロジェクト、中小企業とのコラボレーションなどを通して、障害のある人のアートを介した社会参加を促してきました。

rawsideでは、以下5つの理念を掲げて、活動を展開しています。

- ・障害の有無を問わず、普遍的な芸術的価値のある「生(raw)の創作者」を紹介する。
- ・支援学校などを卒業した障害のある人たちのための創作活動の場をつくる。
- ・「生(raw)の創作者」および彼らの創作物を媒介に新しいネットワークをつくる。
- ・このネットワークを拡張するべく、活動にインスピレーションを与え、価値を共有し、経済的にお互いを支援することにより活動を安定的に持続させる。
- ・参加する一人ひとりが自分の可能性を広げて暮らせるようにサポートする。

また2015年には、「障害のある人の創作物がもっている固有な個性と力を社会と“つなぐ(=it)”-“場所(=jang)”」として、共同プロジェクト「it-jang(イッ-チャン)」をスタートしました。韓国では、福祉を受ける(また仕事をしていない)障害のある人たちの創作活動および芸術活動は贅沢だと思われてしまい、特に成人期の障害のある創作者たちが自らの可能性を広げ、活動を継続するのが難しい状況にあります。また、rawsideのようなNPOに対しても、国からの継続的な支援制度はなく、一時的な補助金を頼って活動を続けることも困難です。そこで、この課題をより多くの人たちと共有し、私たちが抱える問題をともに解決できる場所をつくろうと考えました。

it-jangでは、rawsideの協力者であるさまざまなアーティスト、デザイナー、小規模な企業とともにワークショップを企画し、商品開発を行っています。商品開発のプロセスでは、協働

するデザイナーや企業、障害のある創作者それぞれの良さが交じり合うことで生まれる魅力を重視しています。また展示会「Link Market」やフォーラムを実施するなど、この活動や商品を社会に届ける試みも展開中です。これらの活動を通して、一人ひとりがもつ個性と美しさを認め、発信することで、より多くの人たちがクリエイティブな発想で、社会とつながる可能性を探りたいと考えています。



展示会「Link Market」

BOOK REVIEW

これからの
福祉や仕事を考える 3冊

SELECTOR



熊倉敬聡
[研究者]

01



『民藝のインティマシー』

著者：熊田崇
発行：明治大学出版会 / 2015年初版

民藝を懐古的に論じるのではなく、これからの生活デザインの思想・技法として読み直す試み。Art of Livingとしてのものづくり、はたらき方への指針。

02

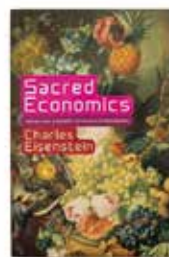


『アウトサイダー・アート入門』

著者：榎木野衣
発行：幻冬舎 / 2015年初版

アウトサイダー・アートやアール・ブリュットを、「良い」「正しい」福祉・文化政策的言説に回収することなく、アートが本来宿す「悪」や「狂気」まで論じ切った痛快な1冊。

03



『Sacred Economics』

著者：Charles Eisenstein
発行：Evolver Editions / 2011年初版

資本主義を超えるこれからの経済、特にギフトエコノミーを論じる上で、まず読むべき1冊。資本主義的でない生き方、仕事とは何か？について具体的なビジョンを描ける。

3冊の本を選んだ理由

近代ヨーロッパがつくった「アート」。それが決定的な限界を迎えつつある今、人類にとっての新たな創造性のあり方が模索されています。その大きな方向のひとつとして、生活、生きることそのものに創造性を取り戻し、生きるアートとしてのArt of Livingを探求する人たちが増えています。私を取り上げた3冊は、それぞれアウトサイダー・アート、民藝、経済と、領域は異なりますが、各々の視点から、まさにこのArt of Livingを探索しています。私たちはこれから、自滅しつつある資本主義的文明からいかに抜け出し、新しい未知の文明をつくっていけるかを試されています。その文明へのヒントが、この3冊には散りばめられています。

熊倉敬聡 / 1959年新潟生まれ。Ours lab.研究員。元慶應義塾大学・京都造形芸術大学教授。資本主義を超える文明はいかに可能か、それを支える精神性は何か？を研究、実践。著書に『瞑想とギフトエコノミー』『美学特殊C』など。

MESSAGE 小林大祐(Good Job! プロジェクト／一般財団法人たんぼの家)

人の可能性って、シェアできるのでしょ
うか。「可能性の再分配」という言葉を
定義したアンソニー・ギデンズは、「市場
の繁栄」と「健全な福祉」を両立できる
第3の道を信じた社会学者です。市場と
福祉の両立の難しさ、例えば、障害のある
人の多くは、競争社会において労働市場
から敬遠され、福祉社会において市場
と切り離され所得が低いままになる、こ
れは現代も直面している課題です。「所
得の再分配」は金銭的な支援はできても、
その人がはたらきたい想いや居場所
(大げさに言えば、存在してもいいという安

心感)をもつことには応えられません。ギ
デンズは、「教育に投資することで、可能性
が低い(と思われがちな)障害のある人
に機会平等を保障すること」が再分配と
考えましたが、はたしてそうでしょうか。
可能性とは、潜在的な発展を指します。
「こんな生き方アリなのか？」といった
驚きが「はたらき方の潜在的な発展」だ
とすると、障害のある人との協働から生
まれている取り組みこそが、可能性を再
分配しているのだと私は思います。ぜひ
Good Job!展をご覧いただき、人としての
可能性をシェアしてほしいです。



GOOD DESIGN AWARD 2016
グッドデザイン金賞

Good Job! プロジェクトは、福祉と異分野の連携による
新しいはたらき方の創出が評価され、2016年度グッド
デザイン金賞を受賞しました。

【Good Job! Document 06】発行日：2017年2月24日 発行元：一般財団法人たんぼの家 〒630-8044 奈良市大条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 E-mail goodjob@popo.or.jp URL http://www.goodjobproject.com/ 監修：Good Job!プロジェクト
編集ディレクション&編集：多田智美、永江大(MUESUM) アートディレクション&デザイン：原田祐馬(UMA/design farm) デザイン：西野亮介(UMA/design farm) 印刷・製本：株式会社シーズクリエイティブ *本フリーペーパーは、下記の展覧会開催に際し発行されました。
「Good Job! 展 2016-2017」主催：一般財団法人たんぼの家 / 共催：公益財団法人パブリックリソース財団 / 特別協賛：株式会社丹青社、トヨタ自動車株式会社 / 協賛：明治安田生命保険相互会社、コクヨ株式会社、株式会社プリプレス・センター、株式会社西山ケミックス、
株式会社ソフィア / 協力：渋谷ヒカリエ、一般社団法人北海道チャレンジアート&プロダクツ、NPO法人エイブル・アート・ジャパン、NPO法人まる

株式会社 丹青社

TOYOTA

明治安田生命

KOKUYO

株式会社 プリプレス・センター

かばきち

Sophia